

ウェストミンスター宮殿 ウェストミンスター・アビーとセントマーガレット教会

モネの描いた“国会議事堂”から考察するイギリスの時代背景



フランスの画家、クロード・モネ（1840年～1926年）の作品「テムズ川と国会議事堂」をご覧になったことがあるでしょうか。ゆったりとしたテムズ川の流れ、遠くに国会議事堂（ビッグベン）が見えます。棧橋で船を待つ人々……、都会でありながら、そこには長閑な雰囲気があります。

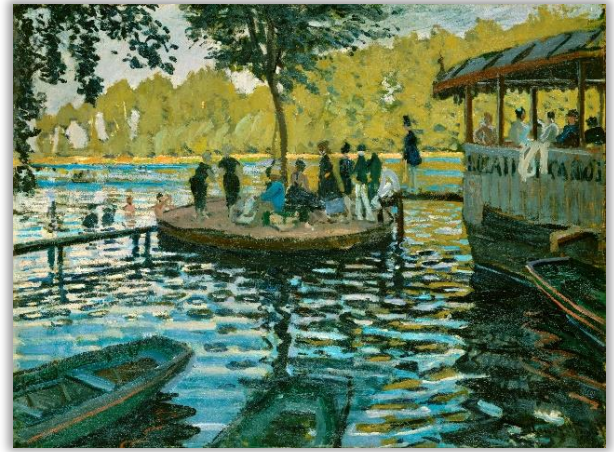


クロード・モネ「テムズ川と国会議事堂」
(1871年/ロンドン・ナショナル・ギャラリー蔵)

まず、この作品について、ご説明しましょう。ビッグベンの尖塔から垂直に下がり、ウェストミンスター橋を直線で結んでみると、長方形の構図となっています。全体も長方形なので、この縮尺は、ほぼ一致します。右岸もビッグベンへと真っ直ぐに伸びて、距離感や遠近感が掴めます。画面の右半分に主要部分が多く描かれているので、左半分に船を2艘描いたり、橋を渡り切った対岸に街並みを入れたりすると、画面が偏らないようにバランスが取られています。色調は、全体を同系色にまとめて、グラデーションの効果が出されています。手前の水面や棧橋は少し強めの色調、そこから2艘の船、ビッグベンへと、遠くに行くにしたがい、薄くなっていきます。棧橋下の水面の描き方は、モネ独特です。太目の筆で、「ぽたっ、ぽたっ」と力強く絵の具を置くような水面の描き方をしています。この描き方は、「サンタドレスのテラス」（1867年）や「ラ・グルヌイエール」（1869年）などの作品にもみられ、青年期のモネの特徴です。



クロード・モネ「サンタドレスのテラス」
(1867年/メトロポリタン美術館蔵)



クロード・モネ「ラ・グルヌイエール」
(1869年/メトロポリタン美術館蔵)

「テムズ川と国会議事堂」の中で力強く描かれているのは、この水面の部分だけです。

この作品からも、モネが水面の光の反射に関心が高かったことが伺えます。しかし、若かりし日の水面の描き方は、後年の「睡蓮の連作」とは異なっています。モネは、時代とともに作風を変化させていった画家ですが、私は、20代から30代にかけての作品に惹かれます。「テムズ川と国会議事堂」のような曇り空の静かな作品は、とても穏やかで、落ち着きがあり、また、「サンタドレスのテラス」や「ラ・グルヌイエール」のような晴天の日の作品は、ハッとするような明るい色彩に仕上げられています。いずれの作品も大胆な筆致で、しっかりと形をとらえていて、まさに秀作と言えるでしょう。

フランスの画家であるモネが、なぜロンドンを描いたのか、疑問に思いませんか。家族旅行でもしていたのかなと思う方もいるでしょうが、そうではありません。

1870年にフランスとプロイセン（ドイツ）との間で普仏戦争が始まり、モネは、兵役を逃れるためパリを脱出し、ロンドンに避難していたのです。「テムズ川と国会議事堂」は、その時に描かれたものです。作品から受ける印象とは異なり、ヨーロッパでは不穏な空気が漂っていました。この絵が描かれた1871年にフランスは普仏戦争に敗北し、プロイセンとの間でヴェルサイユ宮殿にて調印式が執り行われ、ナポレオン3世が失脚しフランス王制が終焉を迎えた年です。大きな時代のうねりの中に、モネはいたのです。現実には、友人の画家、フレデリック・バジールは、普仏戦争に徴兵され戦死しています。そして、モネは、この戦争が終わるとすぐに、フランスに帰国しています。

では、イギリスはどうであったのか、当時の時代背景を語らずにはいられません。なぜなら、その後の世界遺産の登録にも大きく関わっているからです。

作品から読み取れる当時（1870年前後からそれ以降）のイギリスについて触れてみますと、「テムズ川と国会議事堂」で、正面に見える橋はウェストミンスター橋なので、この作品が描かれた場所は、おそらく鉄道の「チャリングクロス駅」と地下鉄の「エンバンクメント駅」をすぐ出た辺り、ハンガーフォードブリッジ付近だと思います。船着き場が描かれていますが、現在もここは船着き場です。ロンドンの地下鉄は、1863年に開業した世界で最初の地下鉄です。ちなみに、2番目に地下鉄が開通したのは、世界遺産都市のブダペストで、1896年のことです。この時期のロンドンには、地下鉄の拡張工事が進んでいました。エンバンクメント駅は1870年開業、この作品が描かれる前年です。モネは、地下鉄に乗って、この駅で降りたのでしょうか。日本では明治4年、江戸時代に既に開通していたことにも、驚きます。また、テムズ川は美しく描かれていますが、実際はそうではなく、

この作品が描かれる十数年前から、テムズ川の悪臭はひどく、コレラもなどの伝染病も発生し、水質も衛生状態も劣悪でした。このことがきっかけで、1860年代になってようやく下水道が完備された、という歴史があります。

1870年前後のイギリスは、世界最大の工業生産国として世界全体の約30%を占めていました。第2次産業革命に発展していた頃です。産業革命に起因する代表的な世界遺産として、『ダーウエント峡谷の工場群（18世後半から19世紀の紡績工場が点在する地域）』、『ニュー・ラナーク（19世紀初頭の綿紡績工場を中心とした産業コミュニティ）』、『ソルテア（19世紀後半の綿紡績工場を中心とした街）』などが挙げられ、イギリス各地に点在しています。海外進出も目覚ましく、特に植民地政策として、奴隷貿易や三角貿易などを盛んに行っていた時代。その拠点となったのが、イギリス中部の『リヴァプール海商都市』です。1870年代のアフリカ植民地化政策は沿岸部にすぎませんでしたが、1880年代になると、内陸部へと支配を加速していきました。その拠点となっていたのがクンタ・キンテ島で、負の遺産『クンタ・キンテ島と関連遺跡群』として知られています。当時、ヨーロッパ諸国は、競い合うようにアフリカの植民地化を進めました。奴隷貿易の傷跡を遺す、セネガル共和国の『ゴレ島』、南アフリカ共和国の人種差別を語る監獄島『ロベン島』なども負の遺産となっており、植民地政策の禍根も、記憶に留めておかなければなりません。

イギリスは、アフリカだけでなく、アジア、特にインドに進出し、1858年にムガル帝国を滅亡させ、1869年にエジプトのスエズ運河を開通させると、大幅に短縮した航行時間でもってインドとの貿易をさらに強固なものとししました。そして1877年、ついにインド帝国（ヴィクトリア女王を皇帝）を建国し、完全に植民地化しました。この植民地政策によってもたらされた産業関連遺産は、両国の建築様式が融合された傑作で、1878年から10年かけて建設されたムンバイの『チャトラパティ・シヴァージー・ターナス駅』や、ダーズリン・ヒマラヤ鉄道（1881年開通）に代表される『インドの山岳鉄道群』などがあります。その支配は、オーストラリアにまで及び、シドニー周辺やタスマニア島、パース近郊など、オーストラリア各地が囚人の流刑地となりました。それが『オーストラリアの囚人収容所遺跡群』で、負の遺産として知られています。1868年までに、実に17万人近くもの囚人が送られました。

たった一枚の絵画から、様々な時代背景が読み取れるのも面白いものです。産業革命で発展を遂げた当時の世界の中心、ロンドン。モネは、期せずして“大英帝国の絶頂期の権威の象徴”を描いていたことになるのですね。「テムズ川と国会議事堂」は、約150年前のロンドンの風景を、時がゆったりと流れる、なんとも穏やかで平和な感じの作品です。まさか、このような時代だったとは、この絵からはとても想像が付きません。また、この作品のタイトルにもなっている国会議事堂は、1860年にゴシック・リバイバルで再建された後の姿、つまり、1834年の火事で焼失して再建された「現在の姿」で描かれています。前々回の「マイスターのささやき」で取り上げた、ジョセフ・マロウド・ウィリアム・ターナー（1775年～1851年）の描いた「ウェストミンスター宮殿（国会議事堂）」は、1835年頃にこの火事の光景を、別の角度から描いた作品です。

1870年代のフランスは、印象派の画家たちが脚光を浴び始めた時代です。しかし、印象派の画家たちも、時代に翻弄され続けていました。ルノワールやドガは兵役に服し、ピサロはモネ同様にロンドンに避難し、シスレーは母国イギリスへは帰らず、パリ郊外に居を移しています。「第1回印象派展」が開催されたのは1874年で、普仏戦争から3年後のことです。そういった時代が過ぎ去った後ですから、印象派の画家たちの作品が、明るく色彩豊かとなったのかもしれない。

今回は、モネの1枚の作品から、イギリスの産業革命と海外進出がもたらした時代、また、世界遺産登録との繋がりなどを考えてみました。

ロンドンに行かれましたら、「エンバンクメント駅」で下車して、「テムズ川と国会議事堂」が描かれた場所を探してみてください。そこには近代的なロンドンの姿があります。そして、そこから歩いて10分、ナショナルギャラリーに向かってください。150年前に描かれた、モネのこの絵に出会えます。

沼田政弘